

令和元年6月14日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K11575

研究課題名（和文）長期にオピオイド鎮痛薬治療を受けている難治性非がん慢性疼痛患者の生活体験の軌跡

研究課題名（英文）Living with chronic non-cancer pain receiving opioid therapy

研究代表者

進藤 ゆかり（SHINDO, Yukari）

北海道大学・保健科学研究所・助教

研究者番号：70433141

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：非がん慢性疼痛に対するオピオイド療法を受けている患者の生きてきた生活体験を明らかにするため、非がん慢性疼痛患者34人に対し、半構造化インタビューを用い質的に分析した。

結果、8カテゴリが抽出された。患者は「消耗させる痛みを抱えた生活に対する憔悴」や、「不条理な痛みによって抱えた心の闇」を抱えていた。「状況打開を目指した試み」を行いながら、「医療に対するジレンマ」を抱え、特に「オピオイド治療による両価的な気持ち」があり、「慢性痛と生きることへの社会の壁」を感じていた。一方で、「慢性的な痛みと暮らしながら妥協していく」や、「生きることへの再起」に向かっていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、日本で難治性非がん慢性疼痛を抱えオピオイド鎮痛薬を長期間使用している慢性疼痛患者の痛みとオピオイド鎮痛薬の主・副作用による生活体験への正負の影響が明らかになった。このことは、今後彼らが日本でオピオイド鎮痛薬を使用しながら慢性疼痛を長期間自己コントロールしていく上での問題点や、看護介入の重要な視点を明確にすることができた。さらには、非がん慢性疼痛患者へのオピオイド治療の日本版ガイドラインや看護介入の方法を検討する上での重要な示唆を示すことができたと考える。

研究成果の概要（英文）：Narratives of daily life of outpatients in Japan receiving opioid therapy for chronic non-cancer pain were obtained to identify health problems and barriers to obtaining a high quality of life. Participants were 34 adult volunteer outpatients treated in pain clinics. Data were collected using semi-structured interviews and analyzed through grounded theory. Participants described daily life experiences of chronic pain and opioid therapy. Informed consent and ethical approval were obtained. Six categories were extracted: "Facing injustice or extreme chronic pain and catastrophizing," "Attempting treatments to improve the condition," "Ambivalent about receiving medical treatment," "Barriers to living with chronic pain," "Finding a compromise while living with chronic pain," and "Regaining a life." These findings expand our understanding of Japanese patients received opioid treatment with chronic non-cancer pain and their coping in daily life.

研究分野：地域・在宅看護

キーワード：非がん慢性疼痛 慢性疼痛 生活体験 オピオイド

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

わが国において慢性疼痛を抱える人は全成人の約22.9%にのぼり、そのうち55.9%が受診しているが、約45%が治療に不満足と報告している¹⁾。いかに多くの人が慢性疼痛に悩んでおり、治療が困難で、多くの慢性疼痛患者に十分な治療がなされていないことが伺える。慢性疼痛の保有数は年齢と共に増加し¹⁾、高齢社会が進むにつれて、今後更に増加していくことが予想される。米国では2001～2010年を「痛みの10年」The Decade of Pain Control and Research」とし、痛みを体温、脈拍、呼吸、血圧につぐ5番目のバイタルサインとして、痛みの評価を診療の義務とし、国策として痛みの治療に取り組んできた。日本においても2009年に厚生労働省が「慢性の痛みに関する検討会」を発足し、2010年に慢性疼痛患者のQOL向上のために必要な対策を提言している。慢性疼痛の発症機序、病態は繊維筋痛症や帯状疱疹後神経痛等に代表されるように複雑であり、その治療方法は多岐にわたる。治療方法は薬物療法や理学療法、心理療法などの非侵襲的治療および神経ブロック、脊髄刺激法などの侵襲的治療がある。欧米では慢性疼痛疾患ごとにガイドラインが作成されているため診療科が異なる場合でも治療方針に差がないのに比べ、日本ではガイドラインが不十分なために慢性疼痛の治療法の選択が、各診療科で差異がみられている²⁾。かつてオピオイド鎮痛薬の効果と有用性が疑問視された非がん性慢性疼痛に対しても、近年では長期間のオピオイド使用が症状緩和、QOLの向上、医療費削減に有用だと報告されている³⁾。オピオイド鎮痛薬とは、麻薬性鎮痛薬と非麻薬性鎮痛薬に大別されるが、日本におけるオピオイドの適応は、ほぼがん性疼痛に限られ、非がん性慢性疼痛の適応はリン酸コデインと塩酸モルヒネ、フェンタニル、ブプレノルフィン、トラマドール配合剤しかない⁴⁾。欧米では非がん性慢性疼痛に対するオピオイド治療のガイドラインがすでに発表され⁵⁾、その有効性および安全性が報告されている⁶⁾。一方、わが国では、医療者、患者双方がオピオイド鎮痛薬に対する漠然とした不安や恐怖といった否定的なイメージを抱えていることが多く、非がん性慢性疼痛患者へのオピオイド鎮痛薬使用が米国、ドイツに比べて極めて少ない²⁾。これには日本において非がん性慢性疼痛の適応があるオピオイド鎮痛薬が少ないことや、ガイドラインの有無が深く関与していた。そのため、非がん性慢性疼痛の的確な診断法とオピオイド鎮痛薬の適正使用を盛り込んだ日本版ガイドラインの開発が待たれていたが、2012年ようやく発刊されたばかりである⁴⁾。慢性疼痛患者に関する研究はこれまで麻酔科、整形外科、内科医による疼痛治療の評価、患者のうつ的な心理傾向を探った研究が主流であり、看護者による研究はほとんどないに等しい。近年、国内でも高齢者の慢性疼痛ケアに着目し、慢性疼痛ケアとケアに影響を与える因子について量的研究⁷⁾が見られてきているが、質的に分析し発展させているものは極めて少ない。更に、がん性疼痛に関連した看護研究に比べ、非がん性慢性疼痛に注目した看護研究は少なく、非がん性慢性疼痛を抱え、オピオイド治療を受けている患者に対する看護研究はないに等しい。

本研究により、難治性の非がん性慢性疼痛を抱え、長期オピオイド治療を受けている患者の体験を経時的に捉える縦断研究を用い、質的に分析することによって、様々に変化する慢性疼痛患者の不安や苦痛、生活への対処、痛みと共に生きるありようを明確に把握することができるであろう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本で非がん性慢性疼痛に対するオピオイド療法を受けている患者の生きてきた生活体験を明らかにすることである。それはまた、このような慢性的な痛みを持つ患者の生活の質を高めるための提案や支援に対する示唆を得ることができる。

3. 研究の方法

研究対象者は、ペインクリニックで治療を受けていた非がん性慢性疼痛患者34人だった。対象者には、慢性痛を抱えてオピオイド治療を受けながら生きていく日常の生活体験や思いについ

で、率直に語ってもらった。データは半構造化インタビューを用いて収集され、グラウンデッド・セオリー・アプローチで分析した。

最初のインタビューは、半構造化された以下の六つの質問から成るインタビューガイドを用いて実施された。

- 1) あなたの痛みの原因として何が起こったのか？
- 2) どのような問題が起こったのか？
- 3) どのようにあなたは痛みを管理しているのか？
- 4) 最も悪いことまたは慢性的な痛みを持っているために変わったものは？
- 5) あなたにとってオピオイド薬を服用することはどのようなことなのか？
- 6) あなたが今後望むことは何ですか？

2 回目のインタビューで初回インタビュー内容について、対象者にその妥当性を確認し、対象者の話した文の意味を明らかにした。インタビューは1回平均1~2.5 hであり、インタビュー内容は対象者の同意のもとICレコーダーに記録し、逐語録化した。

対象となるオピオイド鎮痛薬治療患者が少なく限られているため、本研究の理論的サンプリングは、データ収集の拡大のために特別な経験をもつ患者を新たに探す代わりに、その後のインタビューで新カテゴリについて再度聞き直すことによって、データを収集した。データ分析はグラウンデッド・セオリーを用い、逐語録データを比較検討しながらコード化カテゴリ化した。データ収集毎に比較検討をデータの飽和まで繰り返し行い、中心的なカテゴリやカテゴリ間の関連パターンを見出すことを最終目的とした。

データは質的データ分析に精通している主要な研究者2人によって反復的に評価者間の信頼性を確認するために検討され、コーディングの矛盾点を解決した。

4. 研究成果

非がん性慢性痛に対してオピオイド治療を受けながら生きてきた体験として、8カテゴリが抽出された。患者は激痛発作を抱えた苦しみや日常生活によって影響する非情な痛み、痛みによる生活や心身への不調を含めた「**消耗させる痛みを抱えた生活に対する憔悴**」を体験していた。どの患者にも程度の違いはあるが、不条理な慢性痛の闘病軌跡があり、その痛みによって破滅的思考に陥りやすく、「**不条理な痛みによって抱えた心の闇**」を抱えていた。患者は慢性痛を抱えながら、痛みの治癒への可能性をつなぎ、疼痛障害による社会サービスの活用や状況打開を目指したセルフケアといった「**状況打開を目指した試み**」を行っていた。患者は医療者への信頼と依存や躊躇を抱きながら医療への抛りどころを見出し、その一方で、薬に頼りたくないといった医療依存への警鐘を感じる「**医療に対するジレンマ**」を抱えていた。特に、患者はオピオイド治療による挫折と落胆、副作用などの差し障りやオピオイドがもたらすものへの恐れを感じながら、一方でオピオイドが最後の砦であり、オピオイド治療に対する周囲の理解や奏功感を抱く「**オピオイド治療による両価的な気持ち**」を語った。患者は、社会生活の中で痛みの相互理解を阻む溝やオピオイド処方につながる様々な障壁を体験し、「**慢性痛と生きることへの社会の壁**」を感じていた。しかし、痛みを抱えながらも痛みに関わらず、無心に生きることや痛くても健康であること、活動することといった自分や生活とのバランスを保ち、現在の状況に対して諦観するといった「**慢性的な痛みと暮らしながら妥協していく**」ことを述べていた。そして、痛みがあっても生きがいがある生活をし、周囲の支えへの感謝を感じることによって、可能な範囲での自分らしく「**生きることへの再起**」に向かっていた。

これらの各カテゴリ間に関連しており、オピオイド治療を受けている非がん性慢性痛患者は、

彼ら独自の方法で痛みにより良く対処するために、「状況打開を目指した試み」を行いながら、「慢性的な痛みと暮らしながら妥協していく」ことによって、彼らの通常の生活を再開することへ影響を与え、「生きることへの再起」に向かっていた。一方で、「消耗させる痛みを抱えた生活に対する憔悴」や、「慢性痛と生きることへの社会の壁」、「不条理な痛みによって心の闇を抱える」ことが、痛みに対する対処行動に悪影響をきたし、「オピオイド療法に対する両価的な気持ち」と、「医療に対するジレンマ」が、良くも悪くも彼らに影響を与えていた。

結 論

- オピオイド治療を受ける非がん性慢性痛患者は、長引く不条理な痛みにより憔悴し、社会的に不条理な闘病軌跡によって心の闇を抱えていた。
- オピオイド治療中の患者は、医療へのジレンマやオピオイドについて常に両価的な気持ちを抱えており、医療に対して投げどころとして一方、恐れや不安で薬に依存したくない気持ちを抱えていた。加えて、痛みが再燃するという予期不安も常に抱えており、オピオイド減量に踏み切れないジレンマを持っていた。
- 状況打開を目指した試みを行いながら、自分たちの痛みと折り合いをつけ、妥協していくことによって、可能な範囲で自分らしい生活を取り戻していた。

【参考文献】

- 1) 松平浩、竹下克志、久野木順一他：日本における慢性疼痛の実態。ペインクリニック 32(9):1345-1356,2011
- 2) 斉藤洋司、小川節郎、眞下節他：慢性疼痛に対する薬物治療を中心とした治療実態調査、Pharma Medica 28(2):137-148,2010
- 3) Portenoy RK: Current pharmacotherapy of chronic pain. Journal of Pain Symptom Manage 19:16-20,2000
- 4) 日本ペインクリニック学会：非がん性慢性疼痛に対するオピオイド鎮痛薬処方ガイドライン：20-23,2012
- 5) Chou R et al: American Pain Society-American Academy of Pain Medicine Opioids Guidelines Panel; Opioid Treatment Guidelines Clinical Guidelines for the Use of Chronic Opioid Therapy in chronic noncancer Pain. Journal of Pain 10:113-130,2009
- 6) Deshpande A, Furlan A, et al: Opioid for Chronic Low back pain. Cochrane Database Systematic Review 18:1-37,2007
- 7) Takai Yukari, Uchida Yoko: Frequency and type of chronic pain care approaches used for elderly residents in Japan and the factors influencing these approaches. Japan Journal of Nursing Science6(2):111-122,2009

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件) 査読有

Yukari Shindo, Soushi Iwasaki, Michiaki Yamakage: Efficacy and Practicality of Opioid Therapy in Japanese Chronic Noncancer Pain Patients, Pain Management Nursing, 2018: pp 1-15 in press

〔学会発表〕(計 1 件)

Yukari Shindo, Michiko Aoyanagi, Soushi Iwasaki, Michiaki Yamakage, Lived experience of chronic non-cancer pain patients receiving opioid therapy in Japan: EAFONS 21th Soule , 2018

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：青柳 道子

ローマ字氏名：Michiko Aoyanagi

所属研究機関名：北海道大学大学院

部局名：保健科学研究院

職名：講師

研究者番号(8桁)：30405675

(2) 研究協力者

氏名：山蔭 道明

ローマ字氏名：Michiaki Yamakage

所属研究機関名：札幌医科大学

職名：教授

研究者番号：70285005

氏名：渡邊 昭彦

ローマ字氏名：Akihiko Watanabe

所属研究機関名：札幌医科大学

職名：講師

研究者番号：20175079

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。